

Die Eiche

ディ アイヘ
<http://www.jdg-chiba.com>



Japanisch-Deutsche Gesellschaft
der Präfektur Chiba
〒274-0822 船橋市飯山満町 2-518-1
清和会第2ワールドナースィングホーム内
電話 047-461-9111 Fax 047-461-7010

「歴博の日本関連在外資料調査とシーボルト・コレクションの魅力」 2018 年新春講演会 久留島浩・国立歴史民俗博物館館長 語る

- ◇収集品の目録などデータのデジタル化と公開を急ぐ
- ◇在外の日本研究者の後継者育成が急務
- ◇未来型の「総合資料学」の創生を目指す



協会恒例の新春講演会が 2 月 10 日午後、船橋市中央公民館で、国立歴史民俗博物館館長、久留島浩氏を講師に迎えて行なわれた。金谷誠一郎会長が「久留島館長の綿密で、興味深いお話しが楽しみ」と挨拶し、会員ら 46 人が 90 分の講演に聴き入った。

Philipp Franz Balthasar von Siebold = 写真上

(1796 – 1866) ドイツの医師、植物学者。19 世紀に 2 度来日し、江戸期の日本に近代的な西洋医学を伝えた。日本の自然や生活文化に関する膨大な資料を収集し、ヨーロッパに持ち帰った。帰国後の日本研究が後世の日本学、植物学に貢献し、日本博物館構想を進めるなど日本紹介に情熱を傾けた。



久留島 浩氏【略歴】: 1983 年東京大学大学院博士課程単位取得退学。同文学部助手、千葉大学教育学部助教授、国立歴史民俗博物館助教授、教授を経て、2014 年 4 月から現職。2002 年博士（文学）。専門は日本近世史で江戸幕府直轄地（幕領）の村落研究。旧家の史料を調査・研究し、多くの自治体史編纂に関わり、地域社会が変質・解体するなかで、地域に残る歴史資料の保存・活用についても大きな関心を持つ。著書は『近世幕領の行政と組合村』（2002 年 東京大学出版）『描かれた行列—武士・異国・祭礼—』（2015 年 東京大学出版）など。

以下、その概要である。
(なお、シーボルトの写真、略歴などは講演資料、企画展示の図録などから引用した)

企画展示「よみがえれ！シーボルトの日本博物館」（2016~17 年）の狙い

この企画が私の館長としての初めての仕事だった。私は江戸時代の村落史の研究者で、語学が嫌いで日本史をやったのだったが。歴博で、海外でシーボルト資料の収集やこれらを調査・研究するコーディネーターをするようになり、これが縁で「ドイツと日本を結ぶもの」や「シーボルトの日本博物館」の企画をして歴博、東京、長崎、大阪、名古屋全国 5 会場で展示した。シーボルトは日本では教科書に登場しよく知られているが、ドイツではヴェルツブルク以外ではあまり知られていない。

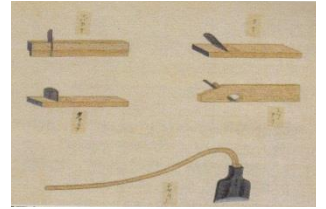
シーボルトの資料は、末裔が所蔵するブランデンシュタイン城（ヘッセン州シュルヒテルン）、ミュンヘンの五大陸博物館、ライデン国立民族学博物館（オランダ）にシーボルトの第一回目のものが沢山ある。ルール大学ボーフムにもある。文献資料はブランデンシュタイン城、次いでルール大学ボーフムがアーカイブを持つ。私たちの一番いい仕事は 7000 点に及ぶ五大陸博物館の全資料をデジタル目録化して、公開することができたことだ。これでシーボルト研究がますます進むと、期待している。「シーボルトの日本博物館」としたのは、彼が日本の資料を収集した段階から「公開したい」という希望をもっていたからだ。

この展示の目玉は五大陸博物館にある家屋模型で、「鳴滝塾の家」（日本人門人に講義をした）と仏壇。模型の中は襖や調度品がきちんとある。彼は課題ごとに研究をしていて仏教を宗教関係でくくっている。農機具や紙を作る舟など木製のミニチュア版、人形などを作らせて持ち帰り、日本を説明している。

シーボルトは骨董品が嫌いだと言っていたから、美術品を集めていないと思っていたが、漆器のいいものがあった。弁当箱は金工品、金属品など美術品ではないが、面白いものも持ち帰ったこともわかった。日本の産業に関するものも沢山集めていて、驚くことに稲の幾つかの品種など原料が残っている。紙は原料の木片、紙の見本帳もかなりあって、作る過程が描かれている。

集めた「大工道具」の重要性

私が歴博に来て間もなく、ライデンの大工道具の調査と展示の話が持ち込まれた。大工道具はどこにもある。だが、江戸の町で作られた時期が確かだという道具は意外に残っていない。セットもない。何故か。大工は最後まで使い切るから、擦り減って残らない。宮大工の道具は継承者がいなくなるなどセットである。基準史料という、確実に 1870 年に作ったというものが案外少ない。ところが、シーボルトは 19 世紀に日本で買ったのは確かだから、作られたのは 50 年、100 年前に作られたかはわからないが「19 世紀に使われていた大工道具」である。これが基準資料になる。ブロンホフ、フィッセル、シーボルトが 1820-30 年代に争うように大工道具をセットで買って帰っている。大工道具はもともとブロンホフが持ち帰ったが、彼は絵師やきざみタバコの道具などさまざまな道具を職人に描かせている。面白いのは（モノの）説明がある画帳とモノと一緒に残っている。シーボルトも真似をしたようだ。この 3 人が持ち帰ったものが建築史、道具の歴史にいかに関係があるかが分かってきた。

**功績大のブロンホフと美術品のフィッセル**

ブロンホフの功績はかなり重要だ。私たちは、彼がオランダ国王に売った収集品を基に目録を作った。フィッセルは美術品を集め、これらはロシアにも行っている。ブロンホフ、フィッセルそしてシーボルトの収集品が重要だ。数はシーボルトが圧倒的に多い。長男のハインリッヒの収集品 5000 点がウィーンにある。シーボルトが何故、さまざまなものを集めることが出来たか。弟子たちに日本の自然科学や植物、制度、文物に関する論文を書かせている。日本にはすでにオランダの医学、植物の分類法などの翻訳本が入っていて、これらに基づいた研究が進んでいた。シーボルトが西洋の知識を日本に一方的に伝えたのではなく、これらの研究をうまく育て刈り取っていったのだ。

Jan Cook Blomhoff (1779-1853)

1809 年出島オランダ商館に着任。ナポレオン戦争時に捕虜。解放後、1817-23 年商館長として着任。王立骨董陳列室の設立に関わり、日本の工芸品、絵画、地図、漆器などを収集。

JALohannes Frederik van Overmeer Fisscher (1800-1848)

1820-29 年までの大半を出島オランダ館員として勤務。多くの日本美術品、工芸品を収集した。

2 人はともに収集品をオランダ国王に売却したが、シーボルトの日本コレクション形成に大きな影響を与えている。

衰退する欧州の日本研究

シーボルト研究のもう一つの波は 2005 年の日本ドイツ年。当時のオランダ大使が中心となり、若い（日本）研究者を育てようとシーボルトハウスを整備して収集品の歴史的意義を伝える場という企画だった。実はこの段階で、後継者がいなくなりつつあった。最近の国際会議は人がほとんど集まらない。ライデンの博物館でも日本展示が縮小され、韓国の展示が増えている。韓国が学芸員を招いて勉強させている。（日韓政府の）文化戦略の違いです。日本から持ち帰られた資料が傷んでいる。漆器は乾燥している欧州では大体ダメになる。收藏には長期的保存と修理計画が必要。私たちはその基本的研究を 2010 年～15 年にかけて行った。そこで気付いたのは日本語を話せる学芸員がいない。古文書も読めない。日本に留学した人もいない。美術の専門家は今や中国、韓国、インドの順で多く、日本美術は下がる一方。経済力とパラレルの関係だ。欧州で日本の収集品がある。だが、日本の研究をしても就職がない。新しい日本研究の潮流を創出しない限りダメだ。日本文化の国際的評価を高めるためには、日本文化の研究をする後継者の育成に努力が必要だ。今なら 60-70 代の研究者がドイツ、米国にもいる。

まだ、まだある外国の日本資料

米国にモース・コレクションがある。1860-80 年代の収集品で、美術品、お土産品、産業関係資料などこれほど全部持って行った人はそうはいない。私たちはウェールズの日本調査に着手したが、スコットランドにもある。イギリスの博物館からも調査を頼まれた。パチカンにもキリシタン資料 1 万点が次々となる。マレガ神父が日本から送ったままの状態である。シーボルトの親友で医師のベルツが日本から持ち帰ったものがある。第二次世界大戦時、スイスに逃れた金持ちが日本のコレクションを寄贈していったものもある。オイレンブルクの収集品もベルリンにある。

新しい学問「総合資料学」の創生

歴博は国内外の多くの研究機関と分野を超えて連携し「シーボルトの日本博物館」を再現できた。彼関連地図資料の全体図の目録と解説を初めて出版し、2016 年からインターネットで公開している。海外の資料調査の成果は研究者同士で共有されにくかったが、歴博は網羅的なデータベースを構築し、国内外の研究機関と共有し次世代、海外の日本研究者が活用できる仕組みを作りたい。歴史は総合することで分かることが沢山ある。垣根を超えた分野が連携する研究体制を作り、歴史研究を飛躍させようとする試みだ。シーボルトが世界で初めて民族学博物館を構想したのが 19 世紀後半のヨーロッパ。150 余年後の今歴博は未来型の学問の創生を目指している。（編集委員 田中正延）



「印象深かった慎み深い日本人」 将来、議論したい大戦の歴史と原子力問題 奨学生の 2017 日本体験 Michael Fraunhofer さん



＜メトロ関係者との懇親会。筆者
は後列左から2番目＞

日本滞在中の出来事は、まだ昨日の出来事のように思われる。一番記憶に残っている点を尋ねられると、何から申し上げればよいのか迷うほどだ。3,000枚以上撮影した写真がそれを物語っている。

印象に残っている事柄としては、日本滞在初日に千葉県日独協会の皆様からいただいた歓迎会である。金沢や奈良では、日本文化、仏教的な祈りの場を体験することができた。また、道端におかれている夏の花々の花壇のような多くの小さいものも私の記憶にとどまっている。

実習は、メトロキャッシュアンドキャリージャパンで行った。大型の流通関連企業としてドイツ、Düsseldorf市を拠点とするMetroグループの子会社である。取引先は、ホテル、レストラン、ケータリングなどの食品小売業となっている。派遣期間中は英語と日本語を交えながら、日本やドイツのことについて相互に理解を深めることができた。ドイツと比較して日本では、お客様は、従業員より上に位置付けられている。これはドイツとは少し違う。

すでに学生時代から独日協会、独日経済サークルや自分の研究を通じて、定期的に日本人や日本文化と接点を持っていたので、本当に驚くようなことはなかった。しかし、多くの商品が想像していたよりかなり安かったのは、思ってもいなかったことだった。日本人の慎み深さは、深く印象に残った。ドイツでは、他者への気遣いはやや少ないようだ。例えば、人前でも大声で電話で話したり、列車に乗り込む際にグイグイと入り込んでいくからだ。

今回の日本縦断した旅行において私たちは、幾度となく運動場や他の運動施設を目にする機会があった。しかし、あまり時間が取れず、例えば野球、さまざまな日本の格闘技の試合を観戦することができなかった。さらに、日本のスポーツ組織について多く知る機会がなかったらいいと考えている

最後に歴史家として私は、将来の奨学生には第二次世界大戦や原子力問題に関わるような批判的なテーマも議論できるようなプログラムもあるとよいと思っている。第二次世界大戦は悲劇だったが、独日の歴史の重要な基盤となると考えている。原子力について、日本の方向性についてほとんど外国からは理解は得られていない状況である。海外の人間にとって、現在のエネルギー構造が日本でどのように進められているかという点の知識が不足しているからである。両国の架け橋となって貢献しようとしている奨学生にとって、忌憚なくエネルギー問題について議論することが必要だととらえている。私自身、次回、日本に旅行する際、広島の実験ドームの視察は、欠かすことができないと思っている。(訳・要約：編集委員 勝見浩明)

「習志野俘虜収容所を知ることには習志野市の歴史を新たな目で見ること」——。地域に根ざした音楽活動をしている“町の音楽好きネットワーク”（戸田志香^{ゆきこ}代表）が2月3日、東習志野で音楽と講演会を行なった＝写真下。「柵を越えた Musik」（昨年8月）に続く収容所100年記念のイベント。

会場近くの児童遊園地に収容所の「ドイツ捕虜オーケストラの碑」があり、参加者には同市商工会議所寄贈のソーセージが配られるとあって220人を超える市民で会場が溢れた。

“もっと知ろう 習志野俘虜収容所” 市民による音楽と講演会開く



講演は東京大学で研究中のフランク・ケーザー氏による「習志野市にいた第二のシーボルト、フリッツ・ルンプ」と、「ドイツ兵士の見たニッポン」（習志野市教委編）の執筆者・星昌幸氏の「ならしの洋学事始～捕虜オーケストラの遺したもの～」。

ケーザー氏は1909年と1914年に来日し、青島で捕虜になったがその後も日本の美術や文化研究に取り組んだFritz Rumpf(1888-1949)の業績や翻訳した日本民話などを紹介した。

星氏は捕虜収容所にあったオーケストラの活動を残されたプログラムなどを基に説明。中でもベートーベンの交響曲第九番合唱付きの日本初演が板東収容所とされているが、習志野収容所でも演奏された可能性に触れたのが注目された。次回は「(習志野俘虜収容所の)ソーセージとビール」を企画しているという。

(編集委員 田中正延)

挑戦した
プレッテン
とサンドイッチ



“創作料理”も飛び出した 「ドイツパンと料理を楽しむ会」 第2回目



「ドイツパンと料理を楽しむ会」が3月18日に船橋市・中央公民館で開かれた。昨年10月に（公財）日独協会（東京）研修生のフェリックスさんを講師に迎えて行った「勉強会」に続く第2弾。会員10人を含めて12（男性5、女性7）人が参加した。前回のベルリンのプレッテン（ハンバーグ）の他、ハム、トマト、ゴーダチーズ、キュウリを使ったドイツのサンドイッチ（クラシック）の2品づくりに挑戦した。

まず、講師役の土屋有里さんがドイツ料理本に掲載されている写真を示しながらドイツ伝統料理の紹介と説明をした。また、私（本間）も講師役として今回の料理の作り方について、自宅で調理した時のエピソードを時々交えながら説明。その後3グループに分かれ調理を始めた。

男性陣のエプロン姿や、慣れた様子でフライパンに油をひき、プレッテンのもととなる合い挽き肉と香辛料を練り混ぜたり形作ったりする参加者の手つきに見入りつつ、今度は慌ててサンドイッチの調理に取りかかる。こちらは前回作ったサンドイッチ（シュトラッマー・マックス）とは違い、バターを薄く塗ったドイツパンの上に2種類のハム、ゴーダチーズ、トマト、キュウリをはさんだ、いたって簡単なもの。

材料には念を入れた。ハムはドイツで多くの金賞受賞の本格派大山ハム、パンは独特の爽やかな酸味が特徴のライ麦を多く含んだドイツパンを有名な人形町のタンネで購入して揃えた。そうこうするうちにプレッテンにも火が通り、良い香りと煙がフライパンから立ちのぼる。中にはプレッテンの上にチーズを乗せる“創作料理”を作るグループもいて、場が盛り上がる。出来上がった料理を皆で談笑しながら試食、最後に参加者全員で記念撮影＝写真右上。15時からの「ドイツパンと料理を楽しむ会」はあっという間に終わった。（編集委員 本間実里）

当協会は、この『ドイツパンと料理を楽しむ会』を定期的に催したいと考えています。会員、及び会員のご家族がご存知のドイツ料理のレシピを事務局へご紹介いただきたいと願っています。多くの会員、ご家族、ことに若い会員、女性会員の参加と、“楽しみたい料理”の希望をお寄せいただくようお願いします。3回目は秋の予定です。

お詫び 前号掲載・会長「年頭のご挨拶」で、核シェルターの各国普及率は公的機関のものではないことが判明しましたので、お詫びして取り消します。（会長 金谷誠一郎）

◇これからの催し

催しもの	開催日	曜日	時間	場 所	内 容 な ど
理事会	4/21	土	15:15 -17:00	船橋市中央公民館 ＝船橋市本町2-2-5 ☎ 047-434-5554	2018(平成30)年度総会付議事項の審議、承認
年次総会	5/12	土	15:30 -16:15	船橋市中央公民館 ＝船橋市本町2-2-5 ☎ 047-434-5554	2017(平成29)年度事業報告、決算報告の承認及び 会計監査報告/2018(平成30)年度事業計画、収支 予算の承認
総会記念講演会	〃		16:30-	〃 〃	宗宮好和・名誉会長 演題「ボトルシップ研究会が 入手した習志野俘虜収容所の写真111枚」
懇親会	〃		18:00-	「今日和」船橋店 ＝船橋市本町2-1-1 ☎ 047-420-2266	会費 5,000円/人

編集後記

◇新春講演会で久留島・歴博館長は海外の日本資料の保存状態を憂慮していましたが、日本でも地方の過疎化が進み、ひとたび災害に遭えば貴重な歴史の資料が廃棄されやすくなっている、と訴えていました。災害時などで24県の大学チームが収集ネットワークを組むまでになった、と。この輪が少しでも広がらんことを◇会員によるコラム「ドイツと私」に加えて、ドイツ人の「私とニッポン」の企画も考えていましたが、昨夏来日した奨学生に今回初めて登場してもらいました。会員皆さまの寄稿とドイツの知人をご推薦ください◇事情により編集から退きます。これまでの至らなさをお詫びし、ご協力に心から感謝します。引き継いでくださる勝見浩明さんら編集委員会への一層のご支援をお願いします。（M.T.）